

## 仮名読十四経治法

---

### 凡例

- 一 此編や衆書中の最も良なるものを。採り摭て集めて。上下の巻とす。朝鮮の許任が説に拠るもの多し。間また積歳の経験を載す。
- 一 国字を以て直読に記するものハ。読易からめんが爲なり。童蒙の行に岐路なきを示す。
- 一 篇中僅に藥物を載するものハ。針灸の及バざる処を補もの也。敢て自分窮るにあらず。只寸心棄るに忍ざるか爲なり。覽もの若し能これが意を加へ。方を需め証に対セバ効を収むるに小補あらん。
- 一 ○置は門中の諸症を頒。其急に臨んで見易からしめんが爲なり。△置ハ愚案なり。蓋し皆拠あれハ也。混見事なかれ。
- 一 編中口授口傳というものハ。敢て秘するにあらず。耳提セざれハ論しがたし故に口授といふ。
- 一 死を起し生を回すものハ。愈穴にあり愈穴刺ざれハ効なし。故に下巻に図翼を載す。腹脇手足骨度の寸尺を記して。愈穴の分寸を知しむ。全く骨度正誤の図説に従なり。

### 卷之上 目録

( 1 ) 鍼灸之大意	( 2 ) 中風門	( 3 ) 中寒門
( 4 ) 中暑門	( 5 ) 中湿門	( 6 ) 火症門
( 7 ) 瘧疾門	( 8 ) 嘔吐門	( 9 ) 積聚門
( 10 ) 水腫門	( 11 ) 疝氣門	( 12 ) 淋病門
( 13 ) 頭痛門	( 14 ) 心痛門	( 15 ) 腹脇門
( 16 ) 脚氣門	( 17 ) 眼目門	( 18 ) 口齒門
( 19 ) 咽喉門	( 20 ) 耳病門	( 21 ) 中毒門

### 卷之下 目録

( 1 ) 銅人形総図	( 2 ) 癰疽門	( 3 ) 騎竹馬穴法
( 4 ) 腸癰門	( 5 ) 疔腫門	( 6 ) 蒜灸門
( 7 ) 附子灸法	( 8 ) 石癰門	( 9 ) 丹毒
( 10 ) 蟠蛇癰	( 11 ) 大小便	( 12 ) 腰背門
( 13 ) 咳嗽門	( 14 ) 膝脚門	( 15 ) 手臂門
( 16 ) 鼻病門	( 17 ) 痢疾門	( 18 ) 痔疾門
( 19 ) 勞瘵門	( 20 ) 四花穴法	( 21 ) 小兒門
( 22 ) 五癰門	( 23 ) 婦人門	( 24 ) 風癰門

(25) 急死門 (26) 草度方 (27) 禁針穴。歌  
(28) 禁灸穴。歌 (20) 針灸吉日 (21) 針灸忌日

仮名読十四經治法卷之上

津山彪編次

(1) 鍼灸之大意

内經に曰く大に勞ると刺ことなく飢たるを刺ことなく大飽を刺ことなく酔たるを刺ことなく驚くを刺ことなく怒る人を刺ことなしと。又曰く形氣不足せるもの或ハ久しく病て虚損せるもの若し針を刺ときハ重て其氣を竭と。又曰く針入ること僅に芒のごとくなれとも氣のいづること車軸のごとしと。

△是いわゆる針の瀉するありて補ひ無ればなり。凡灸をするにハ平且よりして午後に及ぶときハ穀氣虚乏たるゆゑに大に宜し。須からく日午までに施すべし。大概脈絡ハ細き線の若くなれば竹筋頭をもつて炷べし。たでたで其脈に当て灸をすれハ亦よく疾を愈すべきなり。是を以て四肢には但その風邪を去なれば灸多く七壯より五十壯までにして止べし。年の數に随ふに過ることを得ざるなり。然れども臍の下の久冷疝瘕氣塊積氣の証にハ艾炷の大なるほど宜し。故ゆへに腹脊ハ五百壯を灸すべし。唯巨闕鳩尾の穴の如きハ是胸腹の穴といへども灸して五十壯を過さずして止なり。若し艾の大炷を以て多く灸するときハ人をして永く心力無らしむべし。頭頂の穴も亦多く灸するときハ。精神を失す臂脚の穴に多く灸せば血脈枯渴て肉瘦毛枯て手足力なく又精神も失なるべし。蓋し穴処に浅深あり。もし浅穴に多く灸するときハ。必筋力を傷る故ゆへに三壯七壯に過ぎずして止なり医者深く慎て鍼灸を施べし必ず忽にすべけん乎

禁忌

○ 生冷 鶏肉 酒麵 房勞等の物

(2) 中風門 かぜにあたる

△夫中風の証に於る劉河間ハ火を主とし。東垣ハ氣を主とし。丹溪ハ湿を主とす。後世に至て種々の論弁ありといへども。今これを載て益なし。故に略す。脈ハ大法浮沈なるものハ吉なり。急疾にして大數なるハ凶し。

○中風寒を夾むときハ浮遲を帶ず。暑を夾むときハ脈虚す。湿を夾むときハ脈浮にして濇なり

○卒中に言いわず。肉痺れて人事を知らざるにハ神道の穴に灸すること三百壯すれば立どころに差べし。

○遍身麻れ語言ことかなはず。口眼斜ミ喎つりなどするにハ。間使・大迎・三里・承漿・合谷等に灸すること二十一壯づつ十五日を約して治べし

○遍身痒くして虫の行がごとく。但快々く忍びがたく或ハ呵び嚏り眼口斜む等

には。合谷・三陰交・曲池・神門に針入ること七部。而して後肘の尖に灸すること七壯神効あり

○言舌蹇渋して半身遂はず。或ハ左右ともに癱瘓し久しく愈ざるにハ委中の穴に三稜針を入ること二部。悪血数升を出して治べし。若くハ軽症のものにハ風市・絶骨・三里・曲池・肩井・列缺・委中等に灸すること毎日五十壯づゝ七十日を約して治ること神効あり。

○中風眼を弔視語言こと能はず手足屈伸なからざるには背の第二椎と五椎との上に七壯艾炷の大小棗の核乃大きにして炷べし神効あり。

△中風の証内傷に因ものハ外の風邪にあらず多ハ労役することの甚しく而。真気を虚し。或ハ憂へ怒こと積で其気を傷るもの。卒に目眩いて倒れ手足癱痺れ眼口喎り斜ミ。舌強りて語言がたき等ハ必しも針術を数、施すべからず。反て其精神を竭し。命期を促るに至る慎むべしまた肩井・曲池・三里・絶骨・風市・列缺等ハ中風の妙灸穴といへども虚証の中風には多く炷べからず三七壯を期とし。但薬液の中を補ひ気を益を見とめ。或ハ防風羌活天麻半夏木香等の内より順多して手足に真陽の回を候ひて後多く針灸すべし深く虚實を認て施ざれば害多し慎むべし。

### (3) 中寒門 かんにあたる

△脈緊濇なるものハ陰陽ともに盛なり。法に針を用ひて経絡を通ずることなかれ。薬を用ひて当に汗すること無るべし。汗セバ命を傷る。医忽におもふべからず

○五臓に寒氣中りて口禁じて語言ことなりがたく手足強り冷氣刺がごとくに痛ミ。また臟毒下陷し泄痢腹脹大便あるいハ黄色あり或ハ白く或ハ黒く又ハ清穀あるにハ神闕・天枢に灸すること七壯。而して後参朮乾薑の温剤を投して効を奏こと神のごとし

○寒氣湿氣に因て干さるにハ敢て艾火の及べきにあらず。参朮附薑の類に有ずんば効を斂んや

### (4) 中暑門 あつさにあたる 附り霍乱上吐き下くだる

△凡中暑の疾汗し下べからず但熱を解し小便を利するを肝要とす或ハ其甚だしきハ即ち死せんとす忽ち口禁じて語言こと能はず身体反張して四肢動ざるなり此時芭豆も腹中に内ことを得ず瓜蒂も咽に下ざればハ俱に効なし豈に艾火尊ことを知らんや急に両乳の上に灸すること七壯妙効在り而して後。其脈虚微なれば附子剤を施べし若し弦朮なれば桂枝白朮猪苓沢瀉の類にて胃中を暖め小便を利すべし自然に身の熱しも口の乾きも咽の渴きも小便の赤く渋り大便の瀉も止て治するなり

- 中暑霍乱にて上吐せず下瀉せず悶乱はなはだしく胸腹大に疼んで苦楚忍びがたきにハ合谷太冲神闕に七壯づつ火を下して忽ち差ること妙
- 又方臍の上三寸に三壯三焦俞合谷太冲等に針して後。関衝に三稜針を入れること一部。血を出せば立どころに差
- 転筋といふて筋動き攣急。あるひハ疼ミ。神にこたへ。或ハ上吐し下瀉りて霍乱するにハ先急に委中関衝を刺して血を出すべし。しかうざれハ転筋腹に入りて。心を衝遂に死にいたるものなり。医忽におもふべからず
- 霍乱すべて心満て腹痛ミ食を吐き腹鳴ものなり中脘内関関衝より皆血を出して効を奏る
- 暴に大便泄瀉するにハ間使の穴に灸すること七壯若し愈ざれハ更に炷べし
- 霍乱にて已に死し少にても若暖りあるものハ承山を治すべし此承山の穴所ハ脚の腓腸の中央に当て分肉の間だ脚跟を去こと七寸にあり是を起死の穴と名けて死人を起すの妙穴所なりこれに灸すること七壯忽ち蘇ること神のごとし
- 又方塩を臍の中に填めて其上に灸すること二十一壯および氣海の穴に百壯奇効あり

(5) 中湿門 しつきにあたる

- △脈浮にして緩なるハ湿表にあり沈にして緩なるハ湿裏にあり其傷るるや一身ことごとく痛ミあるひは身重く腰いたミ手足倦怠して歩行なりがたく悪寒発熱吐瀉しあるひハ腹痛ミ身体大に重くなるものなり
- 曲池陰陵泉合谷肩井肝俞膈俞等に針すること五部氣を引て経脈に通べししかれども能疾を治すること能はず宜しく独活羌活防風蒼朮陳皮桂皮の薬を服して表発して経を通じ氣を泄すべし速に効あり

(6) 火症門 うちのねつ 附り発熱

- △火症の疾たるや一身ことごとく熱し肌へ燎がごとく脈多くハ浮にして洪数其発するや虚火の上焦に鬱するものなり又実火なるものあり其脈沈にして実大これは冷たるものなどを多く食し陽氣伸ずして致す所なり
- 上焦燎ごとく頭面に瘡を生じ風熱にて腫痛にハ中脘関元石門期門等に針すべし
- 風熱にて齒痛ミ齩き腫るにハ其痛むところに針して氣を洩らすべし
- 肝経に血少なく脾胃瘦れて肝火動き熱の往来するにハ天枢痞根の穴を治べし
- 三焦の実火内外俱に熱するにハ三稜針にて委中を刺し血を取りて治す

(7) 瘧疾門 おこり

- △凡瘧一日に一次午前より発するハ邪氣陽分にありあるひハ日を隔て或ハ三日

を隔てあるひハ午後或は夜に発すハ邪氣陰分に入ものなり又日夜に乱れ発するものハ氣も血も俱に虚するなり

脈弦数ハ多くハ熱弦遅なるものハ多くハ寒と心得べし

○寒多く熱少く口苦く咽乾き大便秘し小便赤く渋り手臂より発ものハ間使三間に三壯妙なり

○頂頭きのあたりより発するものハ痛の日に当て未発ざるまへ百会大椎の尖に灸三壯一時に焼て忽ち治す艾の大き棗の核ほどに作るべし

○寒冷なるものを多く食し脾に滞り鬱して瘡を発しあるひハ脾胃虚しまたハ弱き人の患ひたるにハ神堂に七壯絶骨に三壯

○痲瘡に痰水および瘀血等塊りをなして腹脇のあたり脹痛むに八月の三日と二十七日とに期門に針して後に灸すること二十一壯神効あり

#### (8) 嘔吐門 附翻胃 吞酸 吃逆

△凡嘔吐する症ハ陰氣上へ逆り陽氣の勝ざるより致すものなり又心腹痛んで嘔するなりあるひハ寒熱より致すあり或ハ痰飲の腸胃に客となりて致すありこれハ病なりて後嘔するなれハ其主たる疾を療すれハ嘔ハ自ら止む医者切に其因て来す所を察せんずんハ何の効か有ん

○下閉て大便せず氣上へ逆せて嘔吐するハ関格の症といふ宜しく四関の穴を針して幾次も瀉すべし

○腹中に冷氣を含んで嘔吐するにハ中脘内関に針して陽氣を揺かし三陰交に針を留めて呼吸十二息大に神効

○乾嘔するにハ尺沢中渚隠白章門間使乳の下一寸等に灸三壯

○氣膈に否へて食進がたく背の七九痛には膈の愈臆中間使に三壯

○吐せんとして吐せざるにハ心愈

○嘔吐忽ち寒くたちまち熱して心神煩ハしきには中脘商丘大椎中衝絶骨

○虚人の常に食進ミがたくして嘔の氣味あるハ背の第七八九椎闊き両方に灸五百壯即効あり

○噫氣吞酸ハ胃中の熱と膈上の痰相逆ふて清水を嘔吐す中脘膈愈に灸すべし

△胃口冷へ手足ともに冷へ呃逆するにハ中脘に灸すること二十一壯大に効あり然ども是等の症ハ針灸の能治すべきにあらざらず丁子乾薑桂枝良薑柿蒂の類を温服して良効あり湯液に因て針灸を与ふべし然るときハ愈ざるの病なからむ

#### (9) 積聚門 しゃくつかへ

△積ハつむと訓じ聚ハあつまるの義にして氣血の何日となく積て塊となし或ハ集り結ぼれて腹中こころ好からぬの名なり五積の差別ありといへとも針灸の治療多くハ同じ

○痞悶といふて心下快く脹こころふ覚へ按じて痛なきを痞塊といふ専ら痞根の穴に灸すべし此穴所ハ背の第十三椎の下も左右へ闊くこと各三寸半多くハ左辺に灸す若左右ともに塊あらバ左右を焼べし毎日二百壯より三百

○臍下に結塊ありて腕の大のごとく或ハ盆のごときあり新久を問ず関元間使各々三十壯、太冲大谿三陰交合谷等に灸三壯腎の愈に年の壯病者若し一月を焼ハ果して病の塊り消散すべし

○疼積にて塊なさば肺愈に百壯期門に五壯背の第六椎の下七椎の上。骨をはづして右辺に炷べし小き棗の核の大にして二十一壯神効あり

○奔豚氣といふハ小腹痛積なり是ハ腎水の虚より発の積にして二種あり一ハ奔豚として動気下より発し中腕上腕と敲上るあり俱に腎の積なり脇章門に百壯。腎愈に年の壯。氣海に百壯。期門に三壯。独陰に五壯。太冲。大谿。三陰交。田根に各々三壯約するに五十日を焼て治すべし若しくハ軽症のものハ二十一日に治す

○腹中の積塊。上へ行るより中極に百壯。また懸鍾の穴に三壯。これハ第十二椎の節の下にあり。伏して取るべし

○積氣熱を貯ふときハ。動気臍の傍より生じて。心先へ上り。氣聚りて塊をなし。脊の第七九の椎より。或ハ腰を周りに鬱重し。或ハ痺れ或は咳嗽出て大便難き症あり。腎愈に年の壯。肺愈。大腸愈。肝愈。太冲等に二十一壯。三十日を焼て。腹中に脹悶を覚へざれば。日に百壯より二百に及ぶ。数日にして灸一万壯に至れば。積根すでに絶て。生涯積の患ひなし

○積聚に五種あり。伏梁。息賁。肥氣。痞氣。奔豚。いづれも俱に臟病に属す聚は腑病を主る。皆艾火を用ひて効あり。唯其急に発して腹いため。及び心下を攻るときハ。鍼術を施し急に治すべし。天枢。章門を刺ことに二寸。即効あり

#### (十) 水腫門 うきやまひ

△夫水腫の疾。其症多しといへども。一大要領ハ。虚実を見て治すべし。針灸も効を奏こと多しといへども。其治法ハ食を減じ。塩味。肉味を禁ず。能其方症を対して平易の行氣利水の劑を投ずれば。通身鼓のごとく。腫脹するものも必連々に験を奏る。然れども虚腫の類ハ。脾胃大に虚乏。水を制すること能はず。精臟。虚冷から致すなれば。決して針灸を用ゆべからず。其治法ハ。大抵附子の入たる薬方を証に對し。照して与ふべし。易く治せず。元脾胃の氣和セざるより。水皮膚に妄行して。小便利せず。遂に浮病となる。方書に云。水分の穴を針して。水盡れば斃るとあり。然れども浮腫甚しきときハ。飲食なりがたし。腹に太鼓を抱に似て氣促しく。神悶へ乱れて已に死せんとするあり。其時急に救べし

○三稜針にて水分の穴を刺し。水を出し取こと三分の二つなり。脹下りて臍の辺にいたり。未だ水を渴すに至らず。急に血渴の末。又は寒水石の末を針の穴へ塗付れハ即ち塞で水止なり

○浮腫の人。陰莖。陰卵俱に腫るものなり。辜外腎に針して多く水を出せば安し。水絡をミテ刺ざれば水能出がたし

△水絡の観候口授。若し初心の輩ら妄に鍼し過て。血絡を刺バ大に血を出し。止べからざるに至る。恐るべし。慎むべし。血絡の診候。口授

○惣身及び面も手足も浮き脹て。洪大なるハ内踝の下。白き肉の際に灸すること三壮。能脹を銷し小便を利す

○水腫腹脹たるにハ。水分。三陰交に灸百壮。陰驕に七壮

○手足面目のあたり浮たるにハ。人中。合谷。照海。絶骨。下三里。曲池等に針すること五部。又中腕に一寸。七日にして脹銷し神安して食を進む妙。後艾火を用ひて再び発せざるあり。口伝

#### (十一) 疝氣門

△疝に種々あれども。大抵寒熱の二種に差て治すべし

○疝氣忽ち逆りて。大に心脹を急痛め。悶苦んで呼吸通りがたきの急なるにハ。足の左右の甲根に。三稜針を入れること一部。血を取べし。太冲。内太冲到三壮づつ。独陰に五壮神効あり

○疝毒伏々然として。動気を発し。上腕よりして。鳩尾に逆り。遂に胸を突て。氣促しく。將に死せんとするにハ。急に麵粉水に練り餅のごとくなし。臍の四畔に置き炒塩を衝め厚さ五部ばかりになし灸すること百壮より二百に至る。艾炷の大きさ。小き棗の核ほどに作るべし。微し温たまるを以て度とすべし

○陰頭痛には太敦。太冲。腎俞。陰交に灸す

○陰戸痛には。曲泉。氣衝を治すべし陰腫て挺出せば。曲泉。氣衝。陰驕。崑崙。太敦等に灸二十一壮づつ。妙効あり

△疝の病。十に七八は寒に属す。烏頭。附子。桂枝。羌活の類能治す。針灸は其間に突出して効を奏る

#### (十二) 淋病門 及び遺尿 遺精 白濁

△淋病は五臓の不足より。膀胱に熱を貯ふて致すと。湿毒の熱蒸来りて。水道通ぜず。淋瀝て出ず。或ハ尿水豆の汁のごときあり。或ハ沙石。或は冷淋りて膏蜜のごとく。或ハ熱し淋り。又は血出あり

○絶骨。太冲。氣海。中極に百壮。曲骨にハ七壮より二十一壮に至る

○老人氣虚して淋病を患ふには。脊第七九の椎の闊き一寸半。各々二十一壮

○小便赤く渋り閉て通ぜず。及び熱淋。血淋。或ハ酒の後。房事を行なひて病たるにハ。氣海に二百壯と臍下一寸半に灸五十壯。手の左右の。曲池に五壯。五日を約して治すべし

○知ず精の遺るあり。夢見て遺るあり。腎愈に二十一壯。陽関に五壯

○遺尿には氣海。石門に百壯。八髎に五十日約するに。十日を焼て治べし妙々。然れども飽食するときハ治せず。食すること日に一合半。食を減じ胃囊を細くして後。灸すべし

△余常に瓜蒞を用ひて一吐せしめ。胸膈を疎し後。食を減すること七日。體多微しく瘦らるを見て。烏頭。附子。破胡紙の類を服さしめ。屢々面眩に似たる時ハ。治を得る。瓜蒞を与ふこと増減あり。病者の面色を照して用ゆ。口授  
○溺道より白き濁たるもの出るにハ。照海。期門。陰驕。腎愈。三陰交。皆灸すること二十一壯。神効あり

### (十三) 頭痛門

△凡頭痛を治せんと欲せば。手足の諸陽経を刺べし。針ハ氣を引に功あればなり。譬バ湯の沸を止むるハ。釜下の薪を抽がごとく。然れども痰厥の頭痛のごときハ。氣を引ことあたはず。必ず頭部の穴に灸すべし。即ち能瘥るものなり。何んとなれば艾の性ハ熱するものゆゑ。之に灸するときハ其熱をして。発散せしむなり。或ハ寒ずるものに灸を施すときハ。其寒をして温め和すればなり。又諸陽経を瀉せんと欲する則ハ。先百会の穴に針して。必ず諸陽の熱氣を引て下に行しむものなり。譬バ硯滴の上孔を開がごとし。然れども熱極めて氣を下すこと能ざるものあり。即ち三稜針を以て其頭部の血絡を刺して。血を棄ること。糞のごとくすれば神効あり

△頭痛其因て来するところ多端なれば。一々挙て論しがたし。大抵ハ承満。梁門。関門を幾たびも針し瀉して効あり。唯其頭痛するところの経を考へ。前後左右に随ふて。手足の経穴を刺べし。

### (十四) 心痛門 併に胸痛

△心痛多くは氣鬱に因て熱をなし痛をなす。心眞痛の如きは。針灸薬呪の能治すべき所に非ず。其発するなり。心胸卒に疼痛して悶へ苦しミ。或ハ汗大に出。或ハ手足の爪の甲俱に皆青色。其急なること夕に発して朝に死す。之に類する症あり。針灸薬の及ぶ所なれば。医の預かるところなり。其一二を知して初心に便す

○心微しく痛で汗出苦しきあり。若早く治せざれば眞の心痛にいたる。俱に急に三稜針を用て。神門。列缺。間使。大敦を刺て多く血を取棄べし



- 胸痛んで冷き酸き水を吐くことあり。尾窮骨に灸五十壮。足の太指の内。初の節の横紋の中に三壮。即効あり
- 痰厥せて胸痛ことあり。或ハ胸腫ともに痛には。背の第三椎の下。四の椎の上に近きを量り。背骨の上より両傍へ各々四分に灸二十一壮より五十壮に至る。立ところに愈。奇々妙々の神効あり
- 年久しく胸痛には。足の拇指の爪の甲の根もとの當中に灸七壮。男ハ左。女ハ右。章門に七壮。太冲。独陰に五壮。立どころに愈。もし或ハ愈ざれば更に焼べし
- 腹中に陽氣微くして。冷氣心を衝て傷め。或ハ痰沫を嘔し。大便頻りに利せんとして。快く通せず。或ハ腹中俱に痛には臍の下六寸。両傍の闊き各々一寸づつに。灸すること二十一壮
- 又方蠟繩を以て病人の口の両角を一寸となし。夫を三摺になし。三角とし。一角を以て臍の心に置き。両角ハ臍の下に垂しめ。両傍の端に点記を附て灸二十一壮。神効あり。立どころに差るなり。
- △是病急に救ざれば三四日の中に死す。大病の後。或ハ老人などに是症を発せば一兩日に死す。急に丁子。乾薑の類を服さしめて後。艾火を施すべし。必ず針を刺すことなかれ。針に補瀉ありといへども。実は瀉に効あり。瀉するときハ氣を脱す。予常に門生に示して針を禁ず。針もし腹内に下りて痛忽止ことあり。忽死す恐るべし。丁子。乾薑。茴香の咽とに下りて回陽する也。甚速かなり
- 心痛にて涎て沫を嘔き吐こと。数日にして愈ざれば必ず三の虫あり。是蟲を取れば涎の多きも止。心の痛も止なり。上腕に灸すること七壮。十二日にして治す。三蟲を取の法。口授
- 胸中へ瘀血逆り滞り痛あり。診候口伝。下三里。内関。神門。太淵に鍼して即効あり
- 心痛んで口禁ずるにハ。期門に三壮。陰卵の下。十字の紋に五壮

#### (15) 腹脇門

- △夫脇腹の痛患るや種々あり。実痛のものハ。腹硬満にして按して痛ぞ。死血ハ脇下に引き痛む。声なセバ痰。乍ち痛ミ。乍ち止ハ熱。綿々として増減なきハ寒なり。宿食ハ大に腹痛すれども瀉して後に痛ミ減ず。虫積ハ痛甚しといへども。食するときハ則止無。飢ときハ痛む。左の脇に塊ありて痛む所を移ざるハ死血右脇ハ塊あるとも多くハ食積なり。治法ハ一渠しかたしといへども一二を載ぞ。
- 胃脘痛には。肝愈。脾愈。下三里。胸愈。太冲。独陰。両乳の下各々一寸に灸二十一壮

○冷物と熱物と調和せずして臍を遶り。疼絞るにハ。天枢に一百壯。氣海に二十一壯即効あり

○腹大に脹り堅くして身悶し。臍及び小肚筋ばり堅きは。水分。中極に各々百壯。腎愈に年の壯。太冲三陰交中脘等に。毫鍼すべし

○腹脇手足背諸所へ流注して其痛刺がごとく忍べからざるあり。皆瘀血の清血に誘引て流れ注ぎ。暫く所を定て輒ち移り更るなり。宜しく三稜針を用て其痛む所々に随て刺こと四五穴。血を取捨ること糞のごとくすべし神効あり

#### (16) 脚氣門

脚氣の論ハ孫真人盡セリ外台に曰く飲食の毒自然に丹田に滞りて致すところなりと

△予是を以て為次ぐ。独り脚氣の繁華に多きハ厚味の物の毒するがゆへなり穀醬塩噌の類ひ都て美味に制しなれば其味厚くして胃中に入り。鎖散し易からず素より動作少なき人に多きハ厚味。胃中に鬱滯して食毒自然に積ミ動氣を生じ。疾となるなり。因て来するところ。胃鬱にあり。故に浮腫するもの。十に七八。治法ハ浮腫の有無にかかわらずして。麦飯赤ふ豆を食せしめ。塩を禁じ。飽食を禁じ。胃力を弱らしむを。一大要領とす。

麻黄。独活。羌活。防己。石膏。大黄の類方を選ミ方証相照して。汗を多く取り。胃氣を疎し。水道を利するを肝要とす。臍下の動氣止ときハ病。治したる也。若し汗多亡陽セバ。医の失りなり。汗多亡陽を恐れて汗多セざるものハ。下医なり

○中脘に針して胃氣を洩泄べし。風市。伏兎。膝眼。三里。上廉。下廉。三陰交。絶骨。皆灸すべし。腰骨より上ハ灸を禁ず

○鶴膝風には。中脘。委中。風池等に針す効あり

○足の掌の痛にハ崑崙に針す

○脚ところところ腫起りて大錢のごとく。或ハ長く腫て熱し痛ミ。或ハ流注して所を移。年久しく治せず膿ざるハ。瘀血の経絡に溢れ流れたるなり其血絡を刺して血を取捨ること糞のごとく神効なり

#### (17) 眼目門 めのやまひ

△夫眼目ハ血を得て能視こと明なり。血の眼を養ふ大に過ることあるか。又ハ足ぬことあるときハ。眼病となる虚眼ハ精耗て眼の養精不足して病るなり。針術。効む多し

○眼眶の上下に青き黒きあるハ。尺沢に針して血を出せば神効

○眼の睛痛んで涙なきハ。中脘。内庭に久しく針を留て即瀉すべし

- 瞳子の突出したるには湧泉。然谷。太陽。太衝。合谷。百会。上膠。次膠。中膠。肝俞。腎俞。に針して神効あり
- 大人小兒の雀目にハ。肝俞に灸七壯。次に手の拇指の甲の後ろ第一の椎の横紋の頭に。白き肉の際に灸一壯。即効あり
- 風目にて眶の爛たるにハ。太陽。尺沢に針して血を棄ること糞のごとくすれば神効あり
- 目に白き翳のかかりたるにハ。先その白き翳膜出る所を看わけ。経に随ひ日を遂ふて。氣を通ずるときハ神効あらざることなし

#### (18) 口齒門 併に唇舌

- 経に曰く脾氣ハ口に通ず口臭きハ内熱口乾き或ハ瘡を生ずるハ脾熱に属すと唇舌牙齒俱に其因て病ところ異りといへども脾熱胃鬱に属するもの居多。故に部門を領ざるなり
- 齒痛には疼痛齒に灸七壯即効あり。然れども慎しんで灸を加ことなかれ。必附骨疽を患なり
  - 上齒の疼には下三里に灸七壯効あり
  - 下齒の痛にハ合谷に灸七壯奇効あり
  - 又強く齒いたむにハ急に丁子甘草の煎汁を噉んで即効あり。又方麝香を痛む齒に附て妙効
  - 虫喰齒にて瘡を生じ腐き爛るるものにハ承漿に灸すること七壯妙なり
  - 口噤ばり。牙車開ざるにハ。上関。頰車に五十壯神効あり
  - 重舌舌強ばり食すること能はざるにハ。神門。隱白。三陰交。交々針灸して効を斂む
  - 口中血出るにハ。上星に五十壯。風府に針三部
  - 口中舌ともに白して蛾口のごとく瘡を生ずるハ大抵血熱の致すところなり。承漿。營宮を治すべし。或ハ桑の汁を塗りし忽ち治すべし
  - 口中。膠のこと粘るハ大谿を治すべし
  - 唇。乾燥さけて繭のごとくなるハ多く陰虛火動に因る。迎香。虎口に灸すべし

#### (19) 咽喉門

- △夫咽ハ物を嚥。喉ハ氣を候がふ氣喉穀咽とハ是也。若し熱府の寒冷なる則は咽門破れて声嘶るなり
- 咽喉腫ずして熱塞し。吞飲鼻より還り出るにハ。然谷。合谷。併に久しく針を留めえ即ち瀉べし

○喉腫て胸脇の下。支滿るにハ。中渚。絶骨。内関。合谷。神門。尺沢皆俱に針して効あり

○単蛾にハ天窓の穴。頸の大筋の前。曲頰の端し陷なる中なり針を以て深く患ふ。あたりの喉の内に刺こと一二寸ばかりに至る。暫して即ち出す神効あり

○双蛾にハ天窓。尺沢。神門。下三里。大谿併びに針すべし。少商及び大拇の爪の甲の後根に三稜針を刺こと三次。若し病急ならバ一日に再び針す大に妙

○一切の実火にて咽腫れ痛ときハ其疼処に針して幾たびも瀉すべし

○喉痺腫疼て言語ことならざるにハ三稜針にて桃げ破り血を出すべし。腫ハ破り痛まハ針して数々血を取るべし

## (20) 耳病門

經に曰く。耳塞り噪ものハ九窮通ぜざれハなり心神最も窮に通ず故に心病ときハ先耳噪で鳴り遠声聴ことあたはず

△或ハ又精虚して耳聾れ鳴あり又虚火逆り痰氣耳の中に鬱し或ハ閉或ハ鳴り氣鬱し痞満し痰盛に咽の中快よからぬあり又厚味を常に食し胃火盛にして両耳聾もの或ハ瘡毒愈て後余毒にて耳聾るあり針灸の全く治すること能はずといへども一二を載す

○耳鳴り耳痛で響き頭にこたへ或ハ目睡りて輒ち神寢がたく昼夜大に苦しんで止ざるにハ葦の筒の長さ五寸ばかりなるを耳の孔に挿はさミ儲索麵の粉と水に練り泥のごとくして彼耳に挿入たる筒の四畔を密封し外に出たる筒の頭らに艾を置き灸すること七壮左り痛ときハ右に炷右若し痛ときハ左に炷べし妙駁あり妙

○耳鳴て遠く聴こと能ハさるにハ心愈に三十壮より五十壮に至る

○耳聾たるには先百会の穴を刺し次に中渚。後谿。下三里。合谷。腕骨。崑崙等に針を久しく留む腎愈に二七十四壮より年に随て壯を爲に至る

○五臓虚乏し心神勞役て。体羸瘦て耳聾たるにハ。腎愈に二十一壮。心愈に三十壮。日を遂ふて治すべし

○諸の虫。若し耳に入バ藍の汁を一滴下してよし。又ハ蔥の汁を内るもよし

○蚰蜒の耳に入に藍少しばかりを耳の内に捻れば即化し水となる妙

○蜈蚣耳に入にハ鷄の肉を以て耳の辺に置バ自ら出る。又猫の小便を灌バ。即ち出る。猫の牙に生姜を摺り付れば小便其儘するするものなり

## (21) 中毒門 どくにあたる

△凡物食して忽ち痛ものハ物毒ありて胃化することあたわず故に胃中に受ずして胃口に溜む滞るときハ痛む多くは吐て止べし又物食して一二時を遇し或ハ一日を経て。臍下臍傍にて疼ものハ物毒ありて胃化せず腸胃に滞り痛なり下して

治すべし針灸の能及ぶ所にあらず薬を用べし又河豚の毒に中たるハ毒に酔たるなり血を吐て既に已に死すといへとも必ず葬るべからず四五日を経て蘇るもの多くあり譬バ酒に酔と同じ毒醒れば蘇生すべし又少く中て心中快々とあしく腹痛セバ急に胆礬の末を湯に拌立吞バ其儘吐逆して愈べし或ハ瓜蒞もよし

○食毒心下に滞りて疼痛或ハ悶し苦むにハ幽門。通谷の辺より針して逆まに上へ鳩尾に向刺べし忽ち吐す吐物盡て治す

△予先年阿波の州に遊んで河豚の毒に中りて已に死たる人を見るに既に死セリ針灸更に駁しなく。臆中。湧泉。神闕何の応ずることか有ん。況乎湯液の咽に下づき手術なり。親属相集りて葬を談ず一日一夜を経て遂に棺に斂め柩を曳に至て何か頭微しく顛を見る驚て予をして診せしむ。乃ち心下微陽を覚ふのミ。然ども手散し口開ひて素のごとし。かくて葬に忍ざれハ更に一日を経に心下の微陽謁ず三日に至りて遂に蘇べきことを得たり後これを語り。彼を聞に是のごときの類。間あり中毒の軽きハ兩三日重きハ四五日を過て生を回するもの多しと兄豈卒葬をなすべけんや。

仮名読十四経治法上巻終